大阪市立大学

大学教育だより

RDHE 2021.3 No.18
Center for Research and Development of Higher Education

ロゴデザイン：吉谷ひかり

大阪市立大学
大学教育研究センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
（全学共通教育棟5階）
http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publication/ から読めます

大学教育だより No.18

Voice～学生の声 ● 海外の大学学生との交流を通した学びの経験についての学生座談会
Campus Inquiry ● ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！ 医学部医学科・医学研究科／医学部看護学科・看護学研究科／都市経営研究科
OCU Education News ● 市大教育ニュース！ 学部横断的プログラム／OCUラーニングセンター（教育開発支援室）の紹介
Center Now & Human ● 大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

アン ロゾ（Un roseau）No.22：縦書き部分

● 中瀬 哲史 先生（商学部・経営学研究科） ● 坪田 誠 先生（理学部・理学研究科）

Voice ～学生の声

海外の大学学生との交流を通した学びの経験についての学生座談会

― SIGLOCとウィスコンシン大学マディソン校での国際交流に参加した学生同士の対話 ―

SIGLOCの取り組み紹介

ウィスコンシン大学マディソン校での取り組み紹介

大阪市立大学には海外の大学との多様な大学間交流の取り組みがあり、たくさんの学生が国際交流体験を通じて学んでいます。今回の企画では、それらの取り組みの中から、「SIGLOCへの参加学生」（大学院生2名、学部生5名）と「ウィスコンシン大学マディソン校での交流への参加学生」（大学院生3名、学部生4名）に、2020年9月24日（木）にオンライン（Zoom）で集まってもらい、お互いの経験の共通点や相違点から学び合う座談会を開催しました。

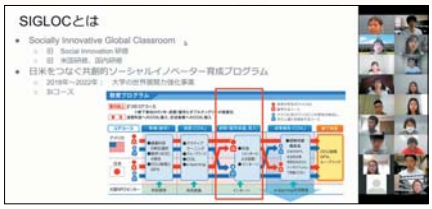
座談会には、SIGLOCを企画実施されている中島義裕先生（経済学研究科）と、ウィスコンシン大学マディソン校での交流を推進されている鍋島美奈子先生（工学研究科）にもご参加いただきました。大学教育研究センターからは飯吉と橋本（司会担当）が参加しました。座談会では、まず中島先生と鍋島先生からそれぞれ取り組みの概要をご紹介いただいた後、学生の皆さんにそれぞれの学びの経験について発表してもらい、質疑応答や意見交換を行いました。

Voice ～学生の声

海外の大学学生との交流を通した学びの経験についての学生座談会

1. 取り組みの概要

【中島先生】 SIGLOCとはSocially Innovative Global Classroomの略称で、2018年度の文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に採択された本学の「日米をつなぐ共創的ソーシャルイノベーター育成プログラム」の一環として行われる海外の学生との協働研修のことです。研修はインターンシップを中心に構成され、アメリカ・日本・オンラインのいずれかで実施されています。本学の学生と海外の学生は、行政、NPO、地域ボランティア団体などのインターンシップ先に関する社会問題について学習・調査するとともに、現場に入って知識を経験に変え、最後にインターンシップ先でのプレゼンテーションと最終レポートの作成を行います。



【鍋島先生】 ウィスコンシン大学マディソン校での交流は、本学と同校それぞれの工学研究科が連携し、「世界で活躍する理系人材育成プロジェクト」として実施しました。2週間の海外研修と、日本での事前学習と事後報告会で構成されます。事前学習では、積極的に英語でコミュニケーションをとる習慣を身に付け、英語でのプレゼンテーションやディスカッションなどの技術・表現を習得することを目標として、本学の大学院共通教育科目「科学英語」を担当されている本條勝彦先生に研修を行っていただきました。ウィスコンシン大学マディソン校での海外研修では語学研修や、試作品づくりを支援するMakerSpaceと呼ばれる施設を活用したワークショップなどを行いました。

2. SIGLOCでの体験と学び

2-① 研修内容の紹介

【SIGLOC1（経営学部4年生）、以下「S1（経4）」のように表記】 まずは、アンドリュース大学での海外研修について紹介したいと思います。研修では、私たち市大生と現地の学生がチームとなり、NPOなど3か所でインターンシップを行いました。インターンシップ先では、実際に働いている方を観察する「ジョブシャドウイング」を行いました。インターンシップ先に関する情報を事前に調べておいた上で、ジョブシャドウイングを行います。その後、チームで勉強会を行い、事前に調べておいた情報とジョブシャドウイングで得た知識や経験が一致したところ、違ったところなどについて議論します。それを踏まえて、もう一度ジョブシャドウイングを行います。

そして、最後にレポートを作成します。レポートは日本語版と英語版の2種類を作るのですが、単純に和訳・英訳をするのではなく、日米の背景の違いを考慮しながら説明を加えたり、省いたりするのが大変でした。

外国に行くと「違い」がたくさん見つかると思うんですが、「違いを楽しむのが観光」で、「違いと共存するのが留学」だとしたら、「違いから何かを学んでいこうとするのがSIGLOC」なんじゃないかなと思います。

【S2（経3）】 国内研修についてご紹介します。市大生11名とフィリピンのデラサール大学の学生15名、計26名が参加したソーシャルイノベーター育成の研修です。研修のテーマとしては、地場産業、環境、公共交通、地域コミュニティー、障がい者支援、高齢者など、多岐にわたる社会課題を扱いました。研修では、事前にインターンシップ先に関する知識を学習しておいた上で、実際にインターンシップを行って課題や現場の状況を体験します。そして、インターンシップでの気づきや疑問点を考察し、最終的にレポートを作成しました。

休日には自由研修として参加学生で一緒に散策をしたり、食事をしたりする中で、お互いの文化の違いを知る機会もありました。

【S3（文4）】 オンライン研修について紹介します。「COVID-19から見えてきた社会課題に対するユニバーサルな解決策を模索する」をテーマとして、少人数のチームに分かれて研修を行いました。私のチームにはザンビア、マレーシア、インドネシア、ロシア、香港からのメンバーが参加していました。研修では、課題解決のためのディスカッションをZoomで行いました。

お互いの文化を知るために週末イベントの企画も行い、オンラインクイズやオンラインカラオケなどを実施しました。多様な文化を持つ学生間で議論する機会は有意義でしたし、英語で議論をする力もついたと感じています。

2-② 質疑応答や意見交換

【ウィスコンシン大学1（生活科学研究科前期博士課程2年生）、以下「W1（生科M2）」のように表記】 皆さんの説明の中でジョブシャドウイングがとても興味深かったです。中島先生、もう少し詳しく教えていただけるでしょうか。また、参加された学生の方々には、ジョブシャドウイングをしてみて感じたことを教えてほしいです。

【中島先生】 ジョブシャドウイングというのは、特定の観察対象の方を決めて、その方がされていることを朝から晩まで観察する方法です。社会見学などでは、外から見ている感じになることが多いと思いますが、ジョブシャドウイングの場合は実際に手を動かされている中で説明を聞くことになりますので、対象の方や場所をより内側から観察することができます。

【S4（工M2）】 質問したいと思ったときに、観察対象の方や周囲の方々に、動作の理由や気持ちをその場で直接聞くことができたのが、とてもよかったです。

【S5（商4）】 私はインターンシップで学童施設に行ったのですが、「現場・現物・現実」や「三現主義」って言われるように、実際にその場所に足を運んで、自分の目と耳で見て聞いて、コミュニケーションを取って、それで感じるっていうことがすごく大切だなと思いました。

【W2（工2）】 研修をオンラインで行う利点について、お聞きしてみたいです。

【S3（文4）】 国や地域を問わず、リアルタイムでコミュニケーションを取れたり、飛行機代や宿泊代などが不要になったりするのは、オンラインならではの利点だと思います。

【S2（経3）】 現地での研修の場合、私たちは現地の生活を見ることができますが、私たちの普段の生活を見てもらうことはできません。相手の生活をお互いに見ることができるというのはオンライン研修の利点だと思います。

【S6（商2）】 私は、日常の中で留学ができるのが利点だと思います。例えば、午前中に研修を受けたとすると、午後からは日常の中

で他のしたいことができます。部活をやってる方だったら、なかなか留学に行けなかったりすると思うのですが、オンラインであれば市大生の方がもっと幅広く研修に参加できる機会になるんじゃないかなって思います。

【W3（工M2）】皆さんのお話を聞いて、自分の生活をしながら国際交流もできるっていうのはオンラインならではの魅力だなって、すごくいいなって思いました。

3．ウィスコンシン大学マディソン校での体験と学び

3−① 研修内容の紹介

【W4（工M2）】私からは国内と現地での語学研修についてご紹介します。国内の事前研修では、100分20コマ分のとても密度の濃い授業を本條先生にしていただきました。現地では、Sara先生にリスニングとスピーキングを中心とした授業をしていただきました。具体的な授業内容としては、賛成と反対に分かれて意見を述べ合う「即興」、発音練習、イディオムなどの活動を行い、最後にプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションは研修全体のテーマである「ものづくりとイノベーション」に則して、「最近実際に発売された画期的なアイデア商品」と「まだこの世にない面白い製品」というテーマで行いました。

【W1（生科M2）】続いて、Makerspaceについてご紹介します。Makerspaceには、3Dプリンター、3Dスキャナー、レーザーカッターなど様々な設備があり、ものづくりが好きな学生の創作意欲が掻き立てられるような空間になっていて、実際に学生同士で熱心に製作や議論が行われていました。設備は工学部系の学生を中心に自由に使用できるようになっていて、学生が中心となって運用面の管理を行っているとのことでした。

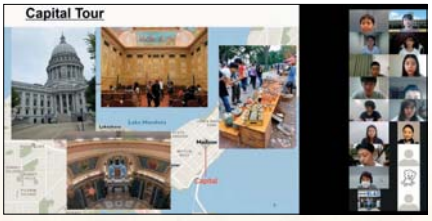
学生が大きな施設を任され、主体的に考えて工夫しながら運用している体制がとても興味深かったです。

【W5（工2）】研修中には、ラジコンカーをモデルとして試行錯誤を繰り返してレースに挑戦するというワークショップも行われました。2人1組のチームに分かれた上で、それぞれのチームにはラジコンカーの基本部分が渡され、難易度の高いコースを達成するための工夫が求められました。

【W3（工M2）】私からは、キャンパス内の他の施設や、私が参加したアクティビティーなどについて紹介したいと思います。

キャンパスには、専攻ごとに異なる図書館があって24時間利用可能なところもありましたし、学生がいつでも利用できるスポーツジムなどもありました。アクティビティとしては、現地で日本語を学んでいる学生たちと日本語と英語の両方でお互いの文化について学び合うカルチュラルエクスチェンジなどが行われていました。学外での工場見学ツアーもあり、例えば、バスタブなどを製造している会社の見学ツアーでは、バスタブの型を取るところから塗装までの工程を見学することができました。

語学の勉強だけでなく文化に触れることもできましたし、工場見学がプログラムに含まれていたところなどは、工学部系の大学ならではで、すごく充実した研修でした。



3−② 質疑応答や意見交換

【S1（経4）】Makerspaceをご紹介いただいたときに創作意欲が掻き立てられたみたいな表現を何度もされていたのがすごく印象的でした。その場に行って「こんなもの作りたいな」って思ったものがあれば具体的に教えていただきたいです。また、Makerspaceの体験が今につながっているのであれば、どのようなことなのか教えていただきたいと思います。

【W1（生科M2）】私は建築が専門なのですが、例えば模型を手作業で作るのは、ほんとにすごく時間がかかるんです。1個の住宅の模型を作ろうと思うと、部品を1個1個カッターで切ってそれらを組み合わせるといった作業が必要になります。そういうときに、ちょっと設計を変えたいなと思っても、模型を作った後では、すごく面倒なことになるので変えないことが多いんです。でも、3Dプリンターがあれば、何度も何度も作り直してブラッシュアップさせることが可能になるなと考えていました。トライ・アンド・エラーを構想段階で繰り返せるのは本当に素晴らしいと思いました。

【W6（理4）】僕の専門は物理学で、物理学を実社会のどこで生かせるかなって、先生や同期と普段からよく議論をしてたんですね。というのは、物理学って考えるだけでは意味がない、使えないと意味がないって思ってまして。先ほど紹介されたラジコンカーのワークショップで、僕はゴム製の大きいタイヤがよいのではと考えました。課題で最初に渡された小さいプラスチック製のタイヤは、物理学で言ったらすごく非効率なので、半径を大きくして摩擦係数を上げたら推進力は大きくなるはずだと。それで実際に3Dプリンターで作ってみると、うまくいったという経験をしました。物理学は実際の社会で活用できるもんなんやなと、これまでの自分の考えが、すごく確信的なものに変わりました。

4．大学での学びとのつながり

【中島先生】2年生でSIGLOCに参加された方には、研修を通じて、その後の大学での学びにどのような違いが出てきたのかをぜひ聞きたいなと思います。

【S2（経3）】私は経済学部の所属で、私が1、2年生のときは経済学を机上の学問という感じで勉強していたと思います。今回の海外でのインターンシップを通じて、経済の問題と社会課題って人が生きている上でつながっているんだと強く思うようになりました。今、3年生になって東南アジア経済のゼミに入っているんですけど、東南アジアを発展途上国という視点だけで見るんじゃなくて、コミュニティーや社会問題という視点でも考えていて、フィリピンの学生と交流したときの体験が生かせているんじゃないかなと思います。

【飯吉】今回のような国際交流の取り組みに参加したことがない他の学生の皆さんにメッセージがあれば、お話しいただけますか。

【W4（工M2）】今回のような研修に参加したいと思い始めたのは、1年生のときだったと思います。高校時代は英語にそれほど興味はなく、海外に行きたいっていうこともなかったんですけど、大学で専門分野を勉強したり、海外の人と交流をしたりする中で、自分の専門分野をもっと深めたいという思いが強くなってきて、今回の留学プログラムに参加し、実際に専門の勉強も深まりました。その他、英語で積極的に学ぶ姿勢もかなり身につきました。

市大の他の学生の皆さんや、今後、市大に入ってくる方々もぜひ参加してくれたらなって思います。ありがとうございました。

［参加教員の感想］

今回の座談会を通して、大阪市立大学の国際教育プログラムが、「現場」や「現物」を介した経験を重視したものであることに気が付きました。学生のみなさんも、真剣に取り組み、自らの成長に結びつけていることがわかりました。（中島）

学生達が海外研修や国際交流を通して受けた刺激や自身の成長について話す姿を見ることができ、私にとっても大変有意義でした。（鍋島）

文責：大学教育研究センター専任研究員　橋本 智也

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publication/ から読めます

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

医学部・医学研究科

医学研究科では、質の高い医療を提供できる医師養成機関としての水準を維持し保証するために、定期的に受審する医学教育分野別認証評価を基軸として、現在、基礎医学から臨床医学へのシームレスで一貫した医学教育の更なる充実を推進するためにFD活動に取り組んでいる。これには教職員の教育に対する意識改革が強く求められており、継続的かつ実践的なFD教員団の能力・資質の開発や向上のための取組みにすべての教職員が積極的に携わることが必要不可欠である。以下に医学研究科で継続的に行っているFD活動について紹介する。

今後も、本学の大学教育研究センターとリンクして継続的に効果的なFD活動を行っていきたい。

（1）FD講演会

毎回1時間で、日々の講義・実習にすぐに活用できる内容を、コンパクトに伝えるよう企画している。2018年度からは、医学科3・5年生も参加し、学部教育の質向上を、教員と共に考える機会にしている。コロナ禍においては、オンライン（Zoom）で同講演会を実施中。リアルタイムと後日の動画視聴により、各回200名近くの教員が参加している。「自分自身も自身が受けた教育からupdate しなければと思った」「教員の時間と労力を惜しまない熱意の大切さが理解できた」「アクティブ・ラーニングの重要性が分かった」などのコメントが寄せられている。

2019年6月
○「大阪市立大学×メディックメディア 共同研究について～医師国家試験合格に向けた学生支援の観点～」株式会社メディックメディア 営業部 影山 裕介 マネージャー
○【Teacher of the Year受賞記念講演】「私の教育の取り組み」医療統計学 加葉田 大志朗 特任助教
○【医学教育分野別認証評価を終えて】「自己点検評価領域5 教員」消化器内科学 藤原 靖弘 教授

2019年9月
○【Teacher of the Year受賞記念講演】「私の教育の取り組み」生物統計学 福井 充 准教授

○【シリーズ：講義・実習の新しい形】「4年生臨床臓器別講義でのMoodle利活用の報告」呼吸器内科学 浅井 一久 准教授
○「1年生新設科目〈物理学の臨床医学への応用〉の報告」放射線診断学・IVR学 三木 幸雄 教授
○【医学教育分野別認証評価を終えて】「自己点検評価領域8 統轄および管理運営」
医学部長・脳神経外科学 大畑 建治 教授

2019年12月
○【医学教育分野別認証評価を終えて】「自己点検評価領域9 継続的改良」血液腫瘍制御学 日野 雅之 教授
○【講義・実習の新しい形】「全学共通科目〈現代の医療〉でのMoodle利活用の報告」
発達小児医学 濱崎 考史 教授
○【Teacher of the Year 受賞記念講演】「私の教育の取り組み」法医学 池田 知哉 講師
2020年9月
○【医学教育分野別認証評価を終えて】「自己点検評価領域4 学生」神経精神医学 井上 幸紀 教授
○【医学教育実習の新しい形】「医学生・若手医師への腹部超音波検査タスクトレーニングの導入と効果について」肝胆膵病態内科学 元山 宏行 病院講師

○「IR（Institutional Research）室だより」総合医学教育学・IR室 栩野 吉弘 准教授
2020年12月
○【医学教育分野別認証評価を終えて】「自己点検評価領域7 プログラム評価」皮膚病態学 鶴田 大輔 教授
○【英語・EBM教育の実際】「医師にとっての英語の必要性・医学英語論文の読み方：授業での取り組み」産業医学 林 朝茂 教授
○【講義・実習の新しい形】「医学生評価、mini-CEXについて」総合医学教育学 豊田 宏光 講師

（2）FDワークショップ（WS）

2017年9月に受審した医学教育分野別評価を機に、新たに採用・昇任した教員を対象に、年2回、ワークショップ（WS）形式のFDを実施している。受講者にとって、本学の医学教育について考える端緒となり、基礎＝臨床のセクションを越えた交流の場となっている。そして、より一層、水平・垂直統合型カリキュラムを実現するためのマイルストーンとなっている。「今まで教育について、しっかり考えたことがなかったので考える機会を持ててよかった」「4時間が一瞬で終わり、楽しんでタスクを担当することができた」などの感想が寄せられている。

医学研究科 教授 総合医学教育学 首藤 太一
全学FD委員・医学研究科 教授 分子病態薬理学 冨田 修平
医学部・附属病院事務局学務課 塚原 立樹

学部研究科 教育・FD 紹介

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

医学部看護学科・看護学研究科

医学科と協同して実施する専門職連携教育

超高齢社会においては、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援を一体的に提供する地域包括ケアを実践することが重要であり、そのためには多職種連携は欠かせません。多職種連携には、まず看護以外の職種への理解と、対象者の情報共有と共通した目標の設定が必要であり、そのためには専門性や個性が異なる相手にアプローチする能力、職種間の葛藤を解決する能力、さらにケース検討会議などをファシリテートする能力や連携のリーダーシップをとる能力も必要とされます。これらの能力を高めるためには、卒前・卒後いずれにも専門職種としての知識や技術に関する縦の教育と、チームの一員として他の職種を理解することやチームリーダー、チームメンバーとしての能力を含めた横の教育、すなわち専門職連携教育（Inter-Professional Education：IPE）が必要となります。

そこで、看護学科では、専門職間でのコミュニケーション力や共感力、チーム力を培うことを到達目標とし、まずは医学生と共に学ぶ、お互いから学び合う、お互いのことを学ぶ機会として、医学科と共同で専門基礎科目「チーム医療Ⅰ」「チーム医療Ⅱ」によるIPEを開講しています。

チーム医療Ⅰ・Ⅱ

「チーム医療Ⅰ」は2018年度から、「チーム医療Ⅱ」は2020年度から開講しています。

「チーム医療Ⅰ」では、看護学科2回生と医学科3回生がコミュニケーションを通じて、お互いの職種の役割や機能を理解し、将来、医療チームの一員として働くために必要なチーム医療に関する基礎的能力を養います。

「チーム医療Ⅱ」では、看護学科4回生と医学科6回生が「チーム医療Ⅰ」で修得した能力を基礎として医療現場で起こりうる模擬患者の事例について検討し、患者中心の全人的医療の実現に向けてチームで協力して問題解決が出来る能力を培います。具体的には、提示した事例について看護学科生と医学科生で構成するグループでディスカッションを行い、それぞれの立場から患者とその家族にとっての最善の医療について検討し、検討した内容についてプレゼンテーションを行います。

学生の気づき

「チーム医療Ⅱ」の看護学科生の授業レポートでは、「チーム医療Ⅰでは、（患者は）“何ができないか”、どのような支援が必要であるかについて考えていたが、（患者は）“何ができるか”の視点を持って、強みを生かした支援を探ることができるようになった」といった強みを活かした対象者理解だけではなく、『“この患者だとどのような専門職が介入する可能性があるのか”と、より多種多様な職種を念頭に置いて多面的に考察することができた」「より地域性に着目した支援を検討できた」などの多職種への理解が深まっていました。

また、「医学科と看護学科で話し合うと意見の違いがあり、それは、医師の治療をして患者を救いたい視点と、看護師の患者の生活や気持ちを尊重したい視点から述べられる事で生じる違いであり、患者を思う気持ちは一緒だという事に気が付いた」といった共感力、さらには「医学科と看護学科双方の意見を取り、患者とご家族へのメリット・デメリットを出し合う事で何が患者・ご家族にとって良いのか、医師・看護師の果たす役割、チーム内での連携を考えて結論を出す事ができ、双方の意見が融合した時に、チーム医療の力が最大限発揮されるのだと学んだ」といった葛藤を解決する能力や会議をファシリテートする能力にまで気づきを深めた学生もいました。

チーム医療の目的の一つに、医療の質を高めることがあります。今後も医療の質を高めるチーム医療を実践できる看護師の育成を目指し、より充実したIPEの実施に向けて教育改善に取り組みたいと考えています。

（写真は全て、2020年1月に撮影したものです）

看護学研究科　在宅看護学領域　准教授　岡本　双美子

学部研究科 教育・FD 紹介

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

都市経営研究科

社会人大学院生と教員の共同研究で調査や自治体施策の提言を!

社会人大学院である都市経営研究科では、毎年教員と院生の共同研究を実施しており、各種調査研究や自治体や公的組織への施策の提言をおこなっています。また、参加型授業を特徴としており、各コース年間約50名（研究科全体で約200名）の外部のキーパーソンとのワークショップや、春・秋の連続シンポジウムなどを外部の行政や各種団体とおこなって調査・研究の実をあげています。以下各事例をご紹介します。

（1）健康寿命が延びず寿命が延びると社会保障費の増大や住民QOLの低下となることから、高度医療とともにそもそも病気にならない健康都市政策が重要になっています。都市政策・地域経済コースでは、関西で「健康都市戦略」の成果をあげている高石市や川西市の市長様や行政担当者、筑波大学の久野研究室と政策を考えるシンポジウムをおこない、これをふまえ、学生共同研究では、テーマのリーダーである野口緑さん（現在大阪市特別参与でスマートシティ担当）を中心に、連携した川西市を訪問し現地調査、担当者との議論を通じ政策立案の研究を深めました。

（1）都市政策・地域経済コース活動写真

（2）都市行政コースでは、今年度は三重県名張市のコミュニティ施策を視察しました。視察当日は、亀井市長に直々にレクチャーして頂くとともに、メディアの取材も受け、地元ケーブルテレビ局のニュースとして放映された他、毎日新聞、中日新聞に記事が掲載されました。視察に参加したメンバーは、普段は自治体職員、地方議会議員、行政書士、社会保険労務士等として現場の第一線で活躍する社会人であり、それぞれの現場で培われた知見と経験をもとに、今後のコミュニティ施策への提言を行うべくディスカッションを重ねており、来年度はじめには成果をまとめ、名張市に還元する予定です。（写真は右上）

（2）都市行政コース活動写真

（3）病院・診療所や社会福祉施設の管理職・専門職が医療・福祉組織のイノベーション経営を研究する「医療・福祉イノベーション経営」コースでは、例年2～3月の土曜・日曜に、原則として1年次の学生全員とコース教員が、1年次学生が勤務する医療・社会福祉施設を訪問して、1施設当たり約3時間をかけて経営実態を調査しています（2020－21年はコロナ禍のため中止）。調査ではまず、訪問先施設に勤務する学生が、自施設の経営・組織変革に関するアクション・リサーチと修了論文の構想をプレゼンテーションします。その後、学生の案内で、研究に関連する施設内外の現場を視察しながら、リサーチと論文の構想について、他の学生と教員を交えて具体的に討議します。

（3）医療・福祉イノベーション経営コース活動写真

都市経営研究科 教授　遠藤　尚秀

学部研究科 教育・FD 紹介

市大教育ニュース!

大阪市立大学での学部横断的プログラム

大阪市立大学では、主専攻（それぞれの学部・学科で修める単位）だけでなく、さらに広く、深く、自発的な学修を進めたいと考える学部生を対象に、学部の垣根を超えた様々な教育プログラムが用意されています。

各プログラムの履修の仕方や、必要事項などの詳細については、全学ポータルサイトや入学手続き書類に同封されている「副専攻ガイド」等の書類をご覧ください。

SIコース Social innovation

新しくSI（ソーシャル・イノベーション）コースがはじまりました。SIコースは社会的課題を発見し、解決するための力を養います。海外の学生と共に地域や福祉、環境などのテーマに従って知識を得て、現場を訪れ、意見を交換し、社会に能動的に関わる中で学びを深めます。学生の提案が実際に採用されるなど実践的な解決にも繋がっています。

●キーとなる科目：ソーシャル・イノベーション入門・国際協働演習

GC Global Communication 副専攻

●目的：不確実な社会で生き抜くことのできる語学運用能力とグローバルマインドを涵養する

●キーとなる科目：GC総合演習１／２／３
※１年次後期～２年次開講

●海外研修：GC_Int（GC副専攻専用カナダ・ビクトリア大学語学研修）
※２年時前期以降、実施予定
※成績優秀者・語学運用能力上位者には研修費支援制度あり

CR Community Regeneration 副専攻

●目的：大阪を拠点として、変化し続ける地域・社会の問題を解決するとともに、その発展に貢献できる人材を養成する

●キーとなる科目：地域実践演習（GATSUN）〈※１・２年次向け〉・アゴラセミナーIa／Ib／II〈※２年次以降向け〉

HR Human Rights 副専攻

●目的：グローバル化する社会において、多様な人々と互いを尊重しながら協力・協働できるリーダーを育成する

●キーとなる科目：ワークショップと講義で学ぶ人権基礎講座〈※１年次以降向け〉・人権問題研究演習Ia／Ib／II〈※２年次以降向け〉

OCUラーニングセンター／教育開発支援室では学生の皆さんの主体的な学修を専門のスタッフがサポートしています。

日々の学修の中での下記のような疑問・課題を専門スタッフに相談できます

一般学修相談

- レポートってどう書くの？
- グループワークってどうするの？
- 主体的に学べって言われるけど、どうすればいいの？

相談受付時間：平日10：40～18：00

試験前には行列ができるほど人気!?

数学学修相談

- １年生の必修科目を中心になんでも！
- 基礎力をしっかり身につけたい
- 今日の授業でわからないところがあった

（担当：数学研究所博士研究員）

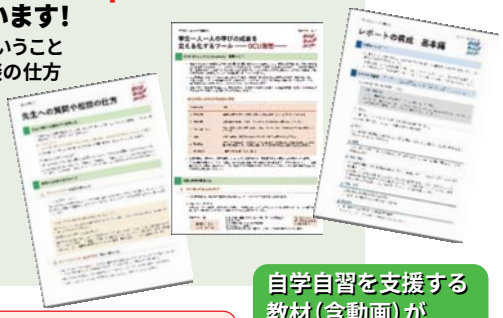
自分のペースで実力を上げたい…でもどうやって？

英語学修支援

- 自分で書いた英語のライティングの課題を基に、個人指導で弱点克服したい
- 自分の実力を知り自分の目的に合わせた学習方法を知りたい

自学自習の教材「学びのTips」がホームページに多数用意されています！

- 大学で学ぶってどういうこと
- 先生への質問や相談の仕方
- OCU指標について
- レポートの書き方
- 数学理解度チェックシート etc.



自学自習を支援する教材（含動画）がWebClass上に掲載

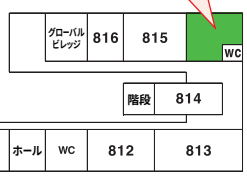
教育と学修支援のためのセミナー企画

- レポートのいろは
- 市大生の井戸端会議～期末試験対策編
- 大学で何研究してるの？聞こう話そう！ミニプレゼン
- Zoomを利用したオンライン自習室とセミナー
- 数学なんでも相談会 etc.

学生による学生のためのイベント！

Twitterで、イベント等のお知らせを受け取ろう！

OCUラーニングセンター／教育開発支援室
【場所】全学共通教育棟1階 815教室隣
【開室時間】平日 9:00~18:00



土曜日４限はOCUラーニングセンター

	月	火	水	木	金	土曜日
1						
2						
3						
4						OCUラーニングセンター
5						

Center Now & Human

大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます!

FD（Faculty Development）活動

（1）FD研究会（年1回）

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための学内外の教育改善・FDの取り組みの紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定されています。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2020（令和2）年度、第18回の全体テーマは「大阪市立大学における2020年度の遠隔授業と学修支援 ― 今後の本学の教育のあり方を考える ―」でした。

（2）教育改革シンポジウム（年1～2回）

教育改革シンポジウムは、大学をめぐる多様な課題について、大学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開かれています。2020（令和2）年度、第28回の全体テーマは「今後の大学の授業のあり方を考える ― 学生の学びを真に引き出す対面と遠隔の組み合わせとは」講演題目:「対面授業と遠隔授業の混合実施における学生の学びを考える」（講師：大阪大学 村上 正行先生）でした。

（3）FDワークショップ・大学教育研究セミナー（年数回）

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等をとり、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育に関する研究活動の成果の紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

（1）大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1～2回発行する査読付き学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

（2）大学教育だより & Un roseau（アン ロゾ）ほか

本学の学生・教員および学外の方々に、総合大学である大阪市立大学における様々な教育の取り組みと、学生の学びの様子や可能性を知っていただくための教育広報誌『大学教育だより』と、本学での学びの道しるべとしての全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を、2006年度から合冊発行し広く学内外に配布しています。また、『新入生のための学びのスタートガイド』も発行しています。

センターが関わっている研究活動

（1）入試と学修の関連および学修の評価に関する研究

本学で学ぶ学生・院生の学修成果の状況を把握し、教育のさらなる充実や改善につなげていくために、学士課程・大学院課程の在学生と卒業生・修了生に対するアンケート調査やインタビュー調査などを実施しています。また、入学者追跡調査を実施するとともに、入試選抜方法や入学後の教育のあり方に関する研究も行っています。それら調査研究の結果は、報告書にまとめたり、FD企画で発表したりして学内での共有にも努めています。成績評価結果をもとに学生一人ひとりが何を身につけてきているのかを自身のキャリアデザインも踏まえて把握できる仕組みであるOCU指標の開発にも協力しています。

（2）教育実践・カリキュラムの開発と評価に関する研究

①学修支援推進関連：教育開発支援室（通称「OCUラーニングセンター」）に協力しながら、自主学修補助教材やTA・SA育成プログラムの開発研究、アクティブラーニング型授業開発支援およびOCU指標を用いた学修支援に関する研究等を行っています。

②大学院共通教育関連：大学院の研究科を超えて履修可能な大学院共通教育科目の制度立ち上げや構築にこれまで関わってきました。現在は、大学院共通教育科目のキャリアデザイン系の講義・演習科目等の開発と提供を行っています。

③学士課程における横断型教育プログラム関連：「大学での学び」への円滑な移行のために行われる初年次教育（学士課程導入教育科目など）の全学的質保証に関わる仕組みづくりへの協力や、全学共通教育における初年次教育関連科目の提供を行っています。また、副専攻プログラムの質保証（評価のあり方研究など）にも協力しています。

（3）本学の教育改善・FDに関する調査研究

本学では、FD（ファカルティ・ディベロップメント）を、「学生が真に学べるように質の高い教育を維持し一層向上させるための、構成員全体（教員・職員・学生）の自律的で組織的な取組」として捉えています。センターでは、全学の教育改善・FDを企画推進するとともに、近年急速に活発化している各学部等部局での教育改善・FDの取組への協力支援も行っています。また、本学教員の教育・FDの日常的活動状況や意識の調査・分析を定期的に行うとともに、集まった教育実践事例を教員相互で活用し合えるWEBデータベースも開発し公開しています。

（4）その他、学内の教育研究・教育改善・開発ニーズに基づく研究

上記以外に、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動も行っています。

①全学と学位プログラムごとの3ポリシーの点検・改訂支援、②教育評価方針と計画の策定支援、③本学の教学IR等、教育の内部質保証システムの構築支援、④ポストドクター向け大学授業実習制度の開発・実施協力、⑤博士・修士人材向けキャリア形成支援の開発・推進など。

教育開発支援室の運営に協力しています!

文部科学省のAP事業のテーマⅤ（卒業時における質保証の取組の強化）に、本学の取組である「OCU指標とその活用スキームによる学修成果の質保証」が2016年に採択されました。事業の一環として、学生の自主的・能動的学修を促し、効果的な教育の実施をサポートする学修支援推進室（通称「OCUラーニングセンター」）を開設しました。補助期間終了に伴い、同室は教育開発支援室へと発展的に改組されました。本センターは、AP事業への申請から事業に協力してきましたが、2020年4月に発足した教育開発支援室の運営にも引き続き参画しています。

大学教育研究センター紀要

RDHE Osaka City University Center for Research & Development of Higher Education

大阪市立大学 大学教育研究センター

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。
以下の運営体制（左図）のもと、3本の研究の柱を基本に据えつつ相互に強く関連をもつ各種プロジェクト（右図）に取り組んでいます。

大学教育研究センターの研究

大学教育研究センターの運営体制

所長　教育・入試担当副学長

大学教育研究センター
副所長（専任研究員）・専任研究員・兼任研究員

教学・FD部門	評価部門	調査・研究部門
全学FD 横断型教育	学修評価 大学評価	調査研究 教学IR

大阪市立大学大学教育研究センター規程第3条（事業）
(1)大学教育に関する**研究、調査、企画、提案、及び提言**に関すること
(2)大学教育に係る**点検、評価及び改善**に関すること
(3)**教育方法の開発、教育・学修支援**及び**全学的FD推進の支援**並びに**各部局等へのFD支援**に関すること
(4)**その他**前条の目的を達するために必要な事項
（平成31年4月1日から施行。）

高等教育の制度やその役割についての研究
（1）学士課程教育システムのあり方
（2）学生相談・学習相談システムのあり方
（3）社会における大学のあり方
（4）生涯学習社会における大学のあり方

全学的FD活動
各種研究プロジェクト

カリキュラム・教育方法の開発に関する研究
（1）学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
（2）初年次教育カリキュラムのあり方
（3）授業改善支援システムのあり方

大学教育の評価および教員評価のあり方に関する研究
（1）大学教育評価のあり方
（2）大学教員評価のあり方
（3）FD活動のあり方

大学教育研究センタースタッフの紹介（令和3年（2021）年3月現在）

■所 長
鈴木 洋太郎
副学長

■専任研究員
飯吉 弘子
副所長 大学教育研究センター教授
研究分野：社会における大学のあり方に関する研究／教育学／大学教育史

西垣 順子
大学教育研究センター教授
研究分野：大学教育の評価に関する研究／教育心理学

平　知宏
大学教育研究センター准教授
研究分野：データに基づく教育改善／認知科学

橋本 智也
大学教育研究センター講師
研究分野：Institutional Research (IR)／教育の質保証／言語学

■兼任研究員
橋本 文彦
経済学研究科教授

小柿 徳武
法学研究科教授

福島 祥行
文学研究科教授

川野 英二
文学研究科教授

北村 昌史
文学研究科教授

水野 寿朗
理学研究科講師

谷口 与史也
工学研究科教授

鍋島 美奈子
工学研究科教授

大西 克実
工学研究科准教授

金子 幸弘
医学研究科教授

永村 一雄
生活科学研究科教授

玉上 麻美
看護学研究科教授

■事務局
岡崎 哲子
教育推進課長

竹澤 直之
教育推進課係長

大谷 敏恵
教育推進課員

編集後記

大阪市立大学の教育広報誌『大学教育だより』と全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を今年も発行しました。新入生をはじめ在学生の皆さん、先生方、学外の方々に向けて、本学の教育・学修の多様な取り組みを紹介する内容となっています。『大学教育だより』の「VOICE」欄では、海外の大学との国際交流の取り組みに参加した学生の皆さんがオンラインで座談会を行い、それぞれの経験や学びを紹介し合いました。質疑応答・意見交換では、現地とオンラインでの学びの違いなど、活発な議論が行われていました。この企画は、総合大学における多様な学生の多様な学びを実感してもらいつつ、自らの学びを振り返ってもらうことを意図して毎年実施しています。コロナ禍で国際交流の取り組みに参加する機会が限られる中、今回は国際交流を通した学びについて、本企画を読まれた学生の皆さんにあらためて関心を持ってもらえればという思いも込めています。「Campus Inquiry」欄では、医学部医学科・看護学科・都市経営研究科の3部局から多様な教育・FDの取り組みを紹介していただきました。「市大教育ニュース」欄では副専攻制度、SIコース、OCUラーニングセンター（教育開発支援室）について紹介しています。『アン ロゾ』では、経営学研究科の中瀬先生と理学研究科の坪田先生が大学での学びのあり方について語りかけて下さっています。本誌が大学での学びの道しるべになれば嬉しく思います。
（橋本）

編集委員：橋本 智也・飯吉 弘子・鍋島 美奈子